

鶴田義男著「アメリカのコミュニティ・カレッジ—その現状と展望」近代文藝社 2012年6月15日刊を読む

アメリカのコミュニティ・カレッジ—その現状と展望—

1. アメリカのコミュニティ・カレッジは学生に対して準学士(associate degree)という学位や種々の職業的資格免許を授与し、それらが設置されている地域社会に対しては多様なその他のサービスを提供している特色ある高等教育機関である。2012年現在、1285校有余のカレッジがあり、在学生総数は600万人(うち定時制学生380万人)を超えている。その規模は100人以下の学生から40,000人以上の学生を収容している。それらの約1/10はより小規模な教育機関で私立カレッジが多く、残り9/10はより大規模で、総合的教科内容を持ち、殆どの州に創設されている。
2. 現在のアメリカにおけるコミュニティ・カレッジは当初ジュニア・カレッジ(Junior College)と呼ばれていた。その後1892年には一時アカデミック・カレッジ(Academic College)等と呼ばれたこともあったが、1896年には再びジュニア・カレッジと呼ばれるようになった。しかし1931年から一部を除いた殆どが“ジュニア”を削除し、単に“カレッジ”または“コミュニティ・カレッジ”と呼ばれるようになり今日に至っている。ごく例外的なものであるが、これらの中には“コミュニティ・ジュニア・カレッジ”または“シティ・カレッジ(City College)”等の名称で呼ばれるものもある。
3. これらのコミュニティ・カレッジは設立主体と主な財源によって公立と私立に大別することができる。公立には国立(主たる財源が連邦政府から支出される)、州立、郡立、市立、学区立等があり、私立には宗教団体立、非営利団体立、地域社会立(公の税金を財源とはしないが、地域社会全体より選出された役員によって運営される)の別がある。
4. しかし、公立にせよ私立にせよ、通常コミュニティ・カレッジという場合、その意味するものは、まず**地域社会に密着した2年制大学で、学生の殆どがその地域の住人である**という親近感がある。事実大部分の学生が自宅から4kmないし8km以内、遠くても48km以内の地域から通学しているのが普通である。
5. この反面では、コミュニティ・カレッジという言葉の持つ響きは「**貧困者の大学**」(Poor Man's College)という蔑視的意味を持っていることも事実である。それは、これまでのコミュニティ・カレッジ学生の大部分が中流階級または低所得階級の子弟であった理由によるもので、この傾向は今後益々増大するものと考えられている。しかし昨今では、同時にまたコミュニティ・カレッジ本来の在り方に対する意識の変革と認識が深まるにつれて**生涯教育、継続教育**そして**4年制大学3年進学準備**の為に身近にあるコミュニティ・カレッジを利用する上流階級の子弟が益々増加する傾向にあることも指摘しておかねばならない。
6. 要するに、**地域に密着し、地域社会住民のニーズに応えつつ、高校卒業後の高等教育を均等に提供する2年制大学**を総称してコミュニティ・カレッジと呼んでいる。
7. その教育課程を大別すれば、4年制大学3年進学課程、完成教育課程、職業教育課程、技術教育課程、成人教育課程(女性、主婦、高齢者、定年退職者、高校中退者、在職者、転職希望者等に対する教育課程)、そして補償教育(発展的補充教育)課程、地域社会教育課程等があり、**あら**

ゆる地域社会住民の凡ゆるニーズを満足させる為のあらゆる分野の教育課程が網羅的に整備された世界の教育制度上類を見ない全く特色ある教育機関こそがアメリカのコミュニティ・カレッジである。

8. 公立のコミュニティ・カレッジで最も古いものは 1901 年創立の Joliet ジュニア・カレッジであると言われているが、1900 年までには既に 1847 年創立の Rockford カレッジが創設されていた。百数十年を経過した今日でもなおさら住民に愛され、住民の必要性に応じているコミュニティ・カレッジとして存続し発展し続けてきたこの特色ある教育機関はアメリカではそれなりの正当な存在理由があるのである。日本を例にとれば、それは公私立500校以上の短期大学や、64校以上の高等専門学校だけでなく、数千校にのぼる専修学校及び各種学校の教育内容までもも包含した教育機関と考えても敢て過言ではない。
9. それはアメリカ的信念を反映し、個人の社会的地位の向上、地域社会への富への貢献、地域社会への奉仕、多様な目的を持った人々に多様な学問的領域のプログラムを提供し、社会の統合、人種を越えた差別の軽減、常に変化しつつある市民的、社会的、宗教的、職業的必要性に適合した教育課程を展開している教育機関である。
10. それはまた、総ての市民に対する社会的平等と教育の機会均等を保障する高等教育機関である。18 歳以上の非高卒者に対する高校卒業資格の授与、罪を犯した人々に対してさえ均等な教育的機会を提供している。日本の刑務所でも何らかの種類の教育と更生の為の訓練は施していても、短期大学の準学士号取得の為の自由で平等な教育まで提供してくれているであろうか？コミュニティ・カレッジこそ、まさしく「人民の、人民による、人民の為の」民主主義の理念と哲学を基本原則とした教育機関である。健全で主権在民の民主主義国家は教育を通じて、学識豊かで思慮深い人間を育成することによって初めて成就できる。知的エリートのみならず、一般大衆の教育がいかに重要であるかを改めて認識する必要がある。この一般大衆の教育の場こそコミュニティ・カレッジである。多種多様なカリキュラムを通じて一人一人の潜在的能力を生涯かけて最大且つ最高に開発し、啓蒙する教育の場こそコミュニティ・カレッジの本質であり、使命であり、役割である。
11. 能力不足の学生や、能力開発の機会を失った学生に対して基礎的読み書きの技能教育、補償教育、発展的補充教育まで、どこの国の、どのような教育機関が保障し開発してくれるであろうか？もしコミュニティ・カレッジがなかったならば、どの教育機関があれだけ多くの地域社会サービスを提供してくれるであろうか？もしコミュニティ・カレッジがなかったならば、どの教育機関が犯罪者、障害者、少数派集団、社会的弱者或いは失業者、高校中退者や教育の機会を失った人々や移民者に対して教育の機会を均等に与えてくれるであろうか？この点だけを考えてもアメリカのコミュニティ・カレッジは古今東西の世界で稀に見る高等教育機関であると言える。また、地域社会の啓蒙に役立ち、一連の広い文化的娯楽的活動までサービスし、地域社会に奉仕してくれる学校としての高等教育機関こそアメリカのコミュニティ・カレッジなのである。

P1 ~ 3

[コメント]

1928 年お生まれの鶴田先生によるアメリカのコミュニティ・カレッジについての最新、また、渾身の著作。コミュニティ・カレッジをこれほどまで熱く語った書を、私は読んだことがない。混迷深まる日本に必要なのは何かを、鶴田先生は本書を通して文字通り人生を懸けて訴えになられていると痛感、感激した。

— 2012 年 9 月 2 日 林 明夫 記 —